みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

開発と文化 : 国立チャビン博物館視察記 (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008355

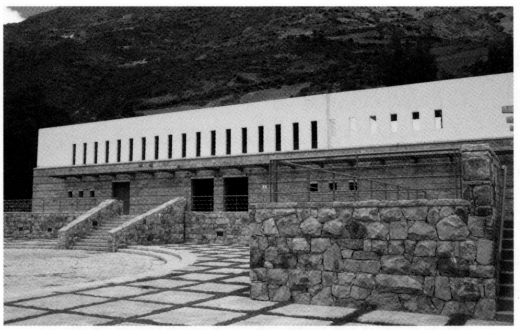
巻頭エッセイ

開発と文化 ―国立チャビン博物館視察記―

関　雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

このほど、ペルー北部高地に位置するチャビン・デ・ワンタル遺跡を訪問した。ユネスコの世界文化遺産に指定された石造の神殿遺跡である。遺跡のある村には、昨年7月、日本のODA（文化無償）による博物館も建った。これに関わる状況調査をすることを思い立ち、実に6年ぶりの訪問となった。

今回の訪問で驚いたのは、村における工事ラッシュである。30年前、初めて訪れたチャビン・デ・ワンタル村は、観光地というにはほど遠く、ろくなホテルもなかったと記憶している。たとえば遺跡と博物館は、細長く形作られた村の両端に位置しているのだが、双方の建物を結ぶ村の目抜き通りには石畳や舗装が施されていた。また通りの両側に並ぶ家々は、改装中や新築中のものが目立ち、壁は鮮やかすぎるほどの黄色のペイントで塗りたくられていた。目抜き通りが串刺すように築かれた中央広場は、すっかり模様替えを終え、花壇やベンチを備えたモダンな公園となっている。聞くところによれば、建築ラッシュによる労働力不足は深刻であり、工賃も大変な値上がりということだ。


国立チャビン博物館

チャビン村のインフラ整備は、博物館効果や村の自助努力というよりも、近くにある鉱山の開発のお陰といってよい。多国籍企業によるペルー最大級の鉱山開発は、チャビンを含むアンカシュ県全体に大きな変化をもたらしている。私が調査したところ、鉱山会社傘下の社会開発担当機関がかなり積極的に動いており、アンカシュ県全域にくまなく恩恵が行き渡るように努力しているように見える。

チャビンの話題から離れるが、30年前に誰に聞いても行き方が分からず、県庁所在地のワラス市で日本登山隊の世話をしていた谷川さんに紹介してもらったタクシーに乗り、悪路との葛藤の末、ようやくたどり着いたオンコパンパ遺跡などは、本道からわずか40分の観光地と化していた。ワリ文化の都市遺跡や3階建ての墓チュルパよりなるこの遺跡でも、今やミニバスに分乗し、ガイドに率いられた普通の観光客の姿を目にする。今回、昔のイメージにとらわれ、雨具やトレッキングシューズで準備万端整えていた自分の姿が滑稽なくらいであった。しかし、決して大資本による観光開発でないことは、ケチュア語を話す農民らが作る組織が入場料を徴収している様子からもわかり、安堵もした。

さて話をチャビンに戻そう。総じて、鉱山開発と社会開発はうまい具合に足並みをそろえているように思えるが、じつはそうでもない。新築や改築された家々の壁の色は鮮やかと言うよりもどぎつく、また改修された公園には、あらゆる建築の要素がぎっしりと詰め込まれて調和がとれていない。ペルー人観光客でさえ、好印象を語る人は少ない。にもかかわらず、村民の美意識は別のようだ。宿泊したホテルの女主人は、村が美しくなったと誇らしげに語っていた。明らかにホストとゲストとの間にギャップが生じている。

こうした現象は、何もペルーに限ることではない。現代日本でも、伝統的な町並み保存地区において、近代的なプレハブ住宅の建設を望む住民がいかに多いことか。しかしペルーの場合は、やや度が過ぎる気がする。チャビンばかりか、鉱山開発にともなう財政的恩恵を享受する地方自治体は、まるで規則でも存在するかのように、必ず広場や役場を改築する。しかも、そこで採用されるデザインからは、アンデス特有のモチーフや意匠は消え失せ、一歩譲ってもスペイン的な雰囲気すら読み取れない。超モダンなマンションのような建物から、ローマの神殿を思わせる柱を何本も備えた驚愕の建物、そしてどぎつい塗装がやたら目立つのである。

日本も景観行政に関しては決してほめられたものではないが、ペルーではもう少し開発のポリシーをめぐって、見る側と見られる側の対話が必要な気がする。ことに観光地では。

肝心のチャビン村の博物館であるが、まだ仮展示の状態で、本格的な常設展示は先に延びそうである。そばに建つ予定の研究棟の竣工も未定である。それだけに、博物館活動と呼べるようなものもなく、村はずれの博物館は、文字通り村の動きとは分離しているように見える。村と博物館とをつなぐためには、ソフト面でのきめの細かい工夫が必要となろう。村にとってのメリットと遺跡や博物館を守り、維持していくメリットとの両立。これが実現できるのならば、チャビン博物館は、よきODAの事例として紹介されていくに違いない。これは一義的にはODAを受けたペルーの宿題であろうが、お決まりのODA批判を受けないように、日本も能動的なウォッチをしていく必要があると思う。